

青年期における養護性獲得の課題——『子ども』理解  
 の一方法としての自己の子ども期の回想——  
 岡野雅子（群馬女子短大）

【目的】 すべて的人是は子ども期を通過して大人になることから、子ども期に自分が感じたこと・考えたことを思い起こすことができる。それは「子ども」という存在や「子どもが生きている世界」についての理解を促す作用を持つと期待される。本研究は、「子ども」に対する理解を深めるための一方法として自己の子ども期を参照することの有効性について検討を試みた。

【方法】 2年制大学3校の女子学生183名を対象に質問紙調査を行い、自己の子ども期の回想・それを通して感じた「子ども」観および子どもに対する感情について回答を求めた。なお、7～10週間前にも子どもに対する感情の事前調査を行った。有効回答数は161名であった。

【結果と考察】 ①全体の子どものに対する感情は、自分の子ども期を回想した後には若干良い方向への移行が認められた。特に、子どもの相手は煩わしい、イライラするなどのマイナス項目に否定する回答の増加が認められた。②子ども期の嬉しかったエピソードは、家族旅行・買ってくれた・誉められた・発表会や誕生会を挙げ、家族や幼稚園保育所の先生が登場する。③「子ども」とは些細なことで嬉しかったり悲しかったりし、発達段階の基礎で、敏感に大人の心を察する、と過半数の者が捉える。子どもが嬉しいと感じる状況は、誉められ認められることの回答が圧倒的に多い。④子どもと良い関係を形成する関わり方は、子どもの目線で一緒に関わる、親はけじめをつけしつける、が多い。⑤子どもに対する感情が好転した群は、子ども期を暖かく懐かしく捉え、子どもは大人が考えるよりよく判っていると感じる傾向にある。⑥これらの結果から、子ども期の回想は「子ども」に対する悪い感情を緩和し、良い感情を持つ者は「子ども」の理解が深まりより一層良い感情を持つようになると言えるようである。